

陳舜臣さんを語る会通信

NO.91

Dec. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年12月1日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

エッセイ集 『曼陀羅の山 七福神の散歩道』

本通信No. 89で陳舜臣さんの小説は、長編、短編併せ、ほぼ紹介し終えたと思っています。ただ、短編集への収録漏れ作品が30~40編ありそうで、これは、初出紙誌で読むしか手がなく、まず、不可能です。

ということで、あとは、随筆ということになりますが、随筆は、小説以上に複雑です。本通信では、既に、順不同で紹介しております。本号では、『曼陀羅の山 七福神の散歩道』(2001 集英社)を取り上げました。『曼陀羅の山』は、下枠内「まえがき」にも記述のあるとおり、3部から成り立っています。初出は下記の通りです。

「第一部 時代の風」 1997年12月14日~98年10月25日「毎日新聞」掲載

「第二部 三燈随筆」 1992年6月29日~93年4月26日「読売新聞大阪版 月曜日夕刊」掲載

「第三部 曼陀羅の山」 1975年12月~98年9月の間、掲載紙誌はまちまちです (編集委員 橘雄三)

集英社版『曼陀羅の山』
「まえがき」より転載
傍線は編集委員の加筆

このエッセイ集は、三部から成っている。第一部は「時代の風」、第二部は「三燈随筆」、第三部は「曼陀羅の山」と、一応、タイトルがついている。

「時代の風」は、毎日新聞が朝刊の一つの欄のタイトルとして与えた名である。数名の執筆者がその欄に月に一度ほどの割で、時評風に自由に書くことになった。一九九七年の年末から始まり、私たちが最初のメンバーであった。執筆者はなんども交替したが、「時代の風」という欄はまだつづいている。執筆者の一人というだけで、著書のタイトルに「時代の風」を独占するわけにはいかない。

つぎに「三燈随筆」であるが、私はすでにこのタイトルで二冊も本を出している(『元号の還暦』及び『仙薬と鯨』)。読売新聞大阪本社版月曜日夕刊に、藤沢桓夫氏が「人生座談」と題して、十年にわたって連載しておられた。藤沢氏が亡くなったあとのその欄を、私に書くように要請され、謹んでお受けしたが、それが三燈随筆である。

三燈とは私の列名である。中国

の家族では命名すべき名の一字が、あらかじめ決められていることが多い。我が家ではなぜか炳・培・鈞・河・楊・燈・地・銀・漢となっている。私は「燈」の世代で戸籍では三男なので、三燈と名のつた。同じ場所に何百年も住んでいると、白髪の老人が生まれたばかりの赤ん坊を叔父さんと呼ばねばならぬので、我が家では父の會祖父の代からこの命名法はやめている。本名にはつけないが、自分は「燈」の世代であると知っておればよいのだ。

その後、私は読売新聞全国版に、「紙の道」を連載することになったので、「三燈随筆」はうち切ったのである。この時点で、まだ本にしていない三燈随筆がかなりあったので、ここに収めることにした。それが第二部だが、全体の総タイトルにすることはできない。

第三部は「曼陀羅の山」で、いわば雑篇であるが、私は読者に肩肘を張らずに読んでいただきたいので、「散歩道」というかんじのタイトルにしたかった。

全体を見渡すと、「布袋和尚」「韋駄天」「福の神」「大黒さまは誰だろう」「金剛力士」「えべっさん」「天神さん」など、なぜか財神たちのことを多く書いている。景気にかげりのみえたところで、神戸でも七福神にあやかるイベント

もおこなわれた。私は意識していないが、そんな市民的神だのみの風潮にまきこまれたのかもしれない。

こうして総タイトルは「曼陀羅の山」、そしてサブタイトルが、「七福神の散歩道」ときまった。七福神信仰は古いが、弁財天はあきらかにインドのサラスパティ(インドの聖河)で、現世の国際化の遅いことをあわれんでいるかもしれない。

二〇〇一年一月

■上段茶字は編集委員の加筆

『元号の還暦 三燈随筆(一)』

(一九九二 中央公論社)

『仙薬と鯨 三燈随筆(二)』

(一九九二 中央公論社)



集英社版表紙 高橋常政画

「第一部 時代の風」各節内容

題	第一部 時代の風 各節内容 ■はキーワードです 順不同
為政者に求めるもの	中国では官吏の登用において、孝廉推挙という制度があった。「孝」とは、よく親に仕えること。「廉」とは、「廉恥」、つまり、心が清くて悪を恥じることだという
"会ばやり"の世に思う	中国の春秋戦国時代、諸侯の「会盟」がひんぱんにおこなわれていた。紀元前651年の「葵丘(ききゅう)の盟」を具体的に記述。その一条に関連し、1938年、国府軍が黄河を人為的に決壊させたことに言及 ■最近のweb会議を予見
大帝国支えた語学の才能	モンゴル帝国は多民族国家で、言語問題は重要であった。帝国の大蔵大臣には多く色目人、すなわち西域のイスラム教徒が就任したが、皇帝との会談は、当然、通訳を要した ■パスパ文字
身体障害者の周辺	文明の度合いをはかる一つの目安を陳さんは、弱者にたいする配慮の程度如何(いかに)に置いている ■悲田院、施薬院 京都盲啞院 恥と文化
タブー再検討	この節は「イスラム教徒は豚を食べない」ではじまる。陳さんの持論/どの民族にせよ、民族の特異性を強調しすぎるのは危険といわねばならない。イスラムがイベリア半島を制していた800年間、アラブとユダヤは僚友であった ■ヤクブ・ベク
世界を駆けめぐる電波	電信のない最後の大戦争はアヘン戦争。ヤクブ・ベク討伐軍編成中に、西郷従道の台湾出兵があり、李鴻章は西へ向かう討伐軍の一部を割いて東に当てた。この時代、既に、電波の時代に入っていた
孫文の足跡を訪ねて	陳さん、孫文の足跡を訪ねてハワイへ。孫文は、ハワイで英語教育を受ける。また、キリスト教に関心をもつ。1924、孫文の広州での講演の一部、「世界主義は虐げられた民族の説くべきものではない。われわれ虐げられた民族はまずわが民族の自由平等を回復し、そのあとはいじめて世界主義を言う資格をもつ」
アルメニアとトルコの応酬	サッカーW杯フランス大会出場チームの民族構成をみて、陳さんは、「いよいよボーダレスの時代になった」と感じる。優勝したフランスチームFWのジョルカエフがアルメニア系であるというところから、アルメニア人の悲劇について記述する
民族の習俗と多様性	アメリカ大陸横断鉄道建設に働いた中国人労働者の死亡率の低かったことに関連し、「中国人は生水は飲まず沸かして飲む」という習慣に言及。また、トルコ人のターバンやトルコ帽を取り上げる
六甲空中散歩	陳さんは、六甲山やその西隣りの摩耶山の北をヘリコプターでまわり、大きなショックを受ける。ショックの原因は、「開発」による景観の変化によるものだった

「民族の習俗と多様性」 補足

私は、中国の江蘇省連雲港市にある、淮海工学院という大学にしばらくいましたが、学生の携行必需品の一つに開水筒がありました。開水(簡体字は开水)は沸かした白湯です。学生寮から教室への途中に开水房(給湯室)下の画像があり、学生は朝、ここで、携行用の開水筒に湯を入れ、大きな備蓄用の開水筒を开水房の前に並べて授業に出ます。そして、午前の授業が終ると、ここへ寄って、大きな開水筒に湯を満たして寮へ持ち帰るのです。この湯は、飲用はもちろん、洗髪などにも使います。妻も一時、大学に滞在していましたが、白湯を飲むのはよい習慣だと、日本に帰っても、今も続けています。ところで、画像左手に暗い入口が見えますが、ここは浴室です。



さらにその左は理容室です。この大学では、一万五千の学生が寮生活をしていました。

「第二部 三燈随筆」各節内容

題	三燈随筆 各節一言付記	題	三燈随筆 各節一言付記
扶桑と蓬萊	扶桑も蓬萊も日本の異称、雅称	韋駄天	日本、中国、インドにおける韋駄天の由来など
古い雑誌とその頁	そこには歴史と人物のディテールが	福の神	七福神のメンバー談義から福助人形まで
日本人奴隷	秀吉の時代から江戸初期	点の話	画竜点睛、点茶、点心などに言及
種子島のとっぼう	日本と違って普及しなかった中国	大黒さまは誰だろう	恵比須様と並んで親しまれてきた大黒さまだが
イベリアの人たち	15C~16C前半、ヨーロッパ最高の文化	金剛力士	寺門の左右に安置されている像だが
"国の花"	日本は桜、オランダ、トルコはチューリップ	えべっさん	七福神筆頭のえべっさん。晋の公子重耳(ちょうじ)の話にまで
鶴は千年	鶴の寿命から肉の味まで	関帝廟雑記	関羽がどうして商売の神様に
鶴のひと声	黄鶴楼にまつわる話ほか	財神たち	春秋の范蠡(はんれい)、殷の比干など
鷹揚	陳琳を赦し家臣団に加えた曹操	風水先生	ほらが吹ける、「風水、文章、茶博士」
鵜の目、鷹の目	中国の鷹狩り、鵜飼にまつわる話	天神さん	菅原道真ということになっているが
景観をめぐる	建設反対の声も強かったエッフェル塔だが	あか色雑談	「朱竹」「朱衣點頭」「赤心」「紅包」
旅の酒	産地で飲む酒の味から全体主義談義まで	戸板康二さん	喉頭がんの手術が声を奪った
浮盃	浮盃という地名から徐福来航などへ	賭けごと	六朝宋の碁の名人羊玄保の話ほか
物心	陳さん、幼児期、台湾帰省時の記憶	懐炉とカイロ	昭和天皇大葬の時の使い捨てカイロ
栗について	詩経に出てくる漁陽、范陽の栗は「天津甘栗」	鏡の効用	三種の神器、三角縁神獣鏡の話他
交通整理	陳さんご自身のことから中国、アメリカ社会の話にまで	三顧の礼	諸葛孔明、周の季歴兄弟の話など
鬼のまちの引っ越し	中国四川省豊都県 ダムができ水没	イヌとヒト	二里頭遺跡、イヌの骨を丁寧に扱う
神から盗む	天上の火を盗んだプロメテウス、上帝の「息壤」を盗んだ鯀(こん)	カイチとは	想像上の動物の一つ「獬豸」
提灯行列由来	冊封使を迎える琉球の儀式ほか	鳩(ちん)毒	鳩の羽を酒にひたしたものの
布袋和尚	中国では布袋さんが弥勒菩薩として安置 弥勒下生→白蓮教	千里	杜牧、李白、曹操の詩を取り上げる
		弓矢の靈力	大相撲の弓取式など
		弩はド号のド	超弩級の「弩」は、イギリスの戦艦ドレッドノートの「ド」の当て字



編集委員撮影

「関帝廟雑記」補足
 河北省承徳の関帝廟 関羽は蓄財の神に
 承徳には、清の時代、避暑山荘が置かれ、皇帝は夏、ここで政務を執った。チベット仏教の寺院が多い。
 左の写真、関帝廟入口上の扁額には「武財神」とあり、前の階段には「義」の文字が。また、紅い横断幕には「接福納財吉祥法会」とあります。
 「納」は「納税(税をおさめる)」等と使いますが、「納財」(財を受ける)という語も。

2011.06.03

「第三部 曼陀羅の山」 各節内容

題 初出年は西暦	第三部 曼陀羅の山 各節内容 ■はキーワードです 順不同
ゆめのたたり 75.12.10 日刊ゲンダイ	まず、玄宗皇帝が夢に見て画家に描かせた鍾馗に始まり、清の皇帝が夢に見て建てさせた沙漠の中の橋湾城から築城を差配した大臣の死刑まで
長崎の眼鏡橋 76.3.21 サンケイ新聞	長崎の眼鏡橋のアーチから蘇州の楓橋夜泊の楓橋、そして、魏墓などの墓門や墓室内のアーチ型に注目、更にはローマのアーチの石組みにまで思いを馳せる
古地図 76.11.28 サンケイ新聞	陳さんは、例えば『阿片戦争』を書くとき、『粵海関志』掲載の絵地図は「私の心をかきたてるものをもっていった」とおっしゃる
うらない	初出：77.1.3 京都新聞 ■甲骨文字 風水 晋の明帝と郭璞 後漢の馬融と鄭玄 諸葛孔明
流砂と波浪をこえて 77.9.11 読売新聞	鑑真東征絵巻、羅什三蔵絵伝、玄奘三蔵絵が一堂に並べられた「大東洋美術展」には、「流砂と波浪をこえて」という副題がついていた
青雲の軸 雑談 84.3 青春と読書	『青雲の軸』の舞台今昔 ■三越神戸店 三色の家 「仁記」の店主鄭さん 新瑞興("装甲ビル")、周達生君 内海岸 岡部伊都子さん
聊斎志異	初出：87.3.22 サンケイ新聞 祖父の書棚にあった「繡像本(しゅうぞうほん)」の一冊
上元雑記 87.1.5 読売新聞	上元は1月15日。唐の都長安は、夜間通行禁止だったが、上元の夜だけは解除された。宋になって、都の夜間通行禁止はなくなったが、上元は庶民の夜遊びの日とされた
黒い男 89.7.7 河北新報	儒教には個人のモラル、すなわち倫理の面と、封建的制度擁護の面とがある。その「反封建」の戦いに挑戦したのが魯迅であった。魯迅の短編小説『鑄劍』に言及
シルクロードブームの心配 88.4.28 共同通信配信	シルクロードブームで心配なのは、東西の相違点が強調されすぎて、共通点が見過ごされることである。共通点のほうに重点をおいてもらいたい(陳さん)
時をこえた孫文の著作 89.10.24 朝日新聞	"孫文の著作は、現代中国理解の宝庫" ■山ロー一郎、伊地知善継監修『孫文全集』全三巻
モンゴル帝国物語	初出：90.1.1 読売新聞 チンギス・ハーンから元の「北走」まで、モンゴル帝国概説
歴史と人物のとらえ方 91.12 新刊ニュース	小説であろうと評伝であろうと、実在した人物を書くとき…①まずその人物の生きた時代をよく理解すること。②書くべき人物を舞台を変えて考えてみる
沖縄を書く	初出：92年 Winter Vol.9「遊&知NHKメンバーズクラブ」 「万国津梁の鐘」を導入に、沖縄の人々のボーダーレスな心、活動を描く。陳さんご自身の沖縄への思い入れも顕著
曼陀羅の山 98.1 青春と読書	寺のない山の代表は六甲山、この山にはゴルフ・コースが似合う。その西の摩耶山、再度山、更に西の須磨、どこにも寺院があり、たいてい真言の寺で密教色が濃い。神戸は案外、護摩壇の似合うまちである
翁という字	初出：98.9 青春と読書 陳さん、自作の漢詩から、龔(きょう)自珍の「己亥雜詩」へ

「青雲の軸 雑談」 補足
傍線及び丸囲み数字は編集委員の加筆

空襲で五丁目の我が家も仁記も灰燼に帰した。三丁目の「新瑞興」だけは焼け残った。これはただの幸運ではない。やはり福建系の有力商館であった新瑞興は、私が生まれた年、大正十三年ごろに新しい店舗を建てはじめたのである。前の年に関東大震災があり、店主の周さんは、どんな大地震にも耐えられるように、鉄筋三階建の建物を、まるで地面に①匍いつくばるかんじに設計し、柱などもやたらに多くつくった。地震に備えたのが、空襲にも有効であったのだ。私たちは装甲ビルと呼んでいたが、コンクリートも必要以上にぶ厚かった。

②戦後、周さんはもはやこの怪物のような店で商売をしなくなった。電報のやりとりでできる繊維がメインラインだったので、山手の自宅でも、けっこう商売ができたのである。この③新瑞興の御曹司の周達生君は、商売をやらないで、民族博

物館の助教授になり、学者の道にはいった。国立の研究機関や大学で、外国籍の人を正式に教授としてうけいれることがようやくはじまり、関西では周君がその第一号になるそうだ。(集英社版 P.265)

■傍線① 左の画像、「匍いつくばるかんじ」は、ピッタリの表現。
傍線② 「新瑞興」が使用しなくなり、岸本産業株式会社(現社名…K I S C O 株式会社)に譲渡。
傍線③ 周達生氏は私(橋)も面識があり懐かしい。



旧「新瑞興」ビルの現状
編集委員撮影